

## 現代日本語に於ける「もうける」の意味用法について

池田 諭

Université de Paris-Est (Marne-la-Vallée)

Lycée Jules Ferry (Coulommiers)

### 要旨

モウケルは他動詞とされ少なくとも3種の不均質な多義性を示すが、果たして同音意義語なのであろうか、それとも多義語なのだろうか。この違いは教育上でも重要なことと思われる。記述では同音意義語を疑い、形一つに対して操作が一つ定まる機能主義的立場を取り多義語とする分析を試みる。これによって表面上の意味変化が単一操作に還元され、観察される多義性は単一操作から文脈変化への適応によって記述されるだろう。最後に分析結果からの日本語教育へ応用可能性についても言及される。

【キーワード】 多義性、単一操作、同音意義語、多義語

### 1 はじめに

多義性の現象は多くの言語に見られ普遍的現象だと思われる。この多義性は多義語と同音意義語語に見られが、多義語と同音意義語はどう違うのだろうか。本稿では現代日本語のモウケルを例にこの多義性について考えたい。

### 2 意味用法の分類

現代日本語のモウケルでは次の様に3種類の意味用法が観察される。典型的な例文と制限を次に見られたい。

【A】 他動詞モウケル 設ける : 備えてこしらえる。しつらえる。

ヲ格がとる名詞は準備して作られる対象であり、対他性を示し、この性質の大小によって更に次の様に下位区分される。

(A-1) 建物、設備、組織、規則を作り備える、設置する。

(1) {事務所/支店/窓口/基準/規則/条件/委員会/文学賞} を {モウケル / 作る}

(2) 30歳までに自分の家を {?? モウケル/ 作る/ 建てる} つもりです。

ここでは対他性は大きく(1)では公の意味を持つまでもなる。(2)の制限はこの対他性がないことから発生すると考えられる。

(A-2) 将来の必要時のために前もって用意・準備する。

(3) {一席 / コーヒー / 食事} をモウケル

(4) {言い訳 / 口実 / 説明} をモウケル

ここではヲ格がとる名詞の対他性は対他人関係である。(4)では名詞の語彙中に対他性があるが、(3)では名詞にはこの対他性は含有されず、モウケルによって対他性が作られ

ていると考えられる。

〔B〕 他動詞モウケル 儲ける : 思いかげず、偶然に利益を得る、得をする。

ここでの特徴は偶然性にある。ヲ格がとる名詞は所有対象性はあるが、対他性はない。

(5) {宝くじ/株/競馬} で大金を {モウケタ/稼いだ}

偶然性を介して構築される得には次の例文の様に様々な得がある。

(6) 相手のエラーで1点モウケタ

(7) 近道をして10分モウケタ

(8) 同乗させてもらってモウケタ

〔C〕 他動詞モウケル 儲ける : 子供を作る

ヲ格がとる名詞にはある種の所有対象性があると思われる。ここで子孫を作ると言う意味があり、動物では不文になる様に思われる。

(9) 彼女は結婚で二児をモウケタ

(10)??犬が5匹の子犬をモウケタ

以上がモウケルの意味用法であるが、その派生形を次に示す。

〔D〕 自動詞形 モウカル 儲かる : 偶然に得をする

この形は〔B〕からの変換のみに可能であり、他の用法からの変換は不可能。

(11) {宝くじ/株/競馬} で大金 {をモウケタ/がモウカッタ}

(12) 相手のエラーで1点 {モウケタ/モウカッタ}

(13) 近道をして10分 {モウケタ/モウカッタ}

(14) 同乗させてもらって {モウケタ/モウカッタ}

〔E〕 名詞形 モウケ 設け 儲け

現代日本語では「儲け」は〔B〕の名詞形としてあり、常用外で〔C〕の意味でも存在する。更に「設け」は〔A〕で準備の意味でやはり常用外であるが観察される。

## 2 問題提起

モウケルの3種類の意味用法を見たが、この動詞は語彙単位として幾つあるのだろうか。

複数個あるとすると同音異義語になり、その根拠は次の2点である。先ず〔A〕〔B〕〔C〕での意味の不均質な分布である。更に〔D〕の自動詞形モウカルへの変換可能性が〔B〕だけに偏っていること。以上から〔A〕=〔C〕≠〔B〕または〔A〕≠〔B〕≠〔C〕となり少なくとも2種の語彙単位による同音異義語が考えられる。

語彙単位を1つとし、単一語彙による多義語として捉える可能性もあり、その根拠は次の2点である。先ず語源が同一であること。その形は「マウク」であり、「将来の為に準備する」<sup>1</sup>などの意味があったようだ。次に3種類の意味用法に対して名詞形モウケが同一形で存在すること。

## 3 先行研究

残念ながら純粋な文法的現象と違って語彙の多義性は分析の対象になり難いらしくモウカルに関する纏まった言語学的記述は見つからなかった。また辞書の記述では、同一項目中に記述があるので、記述の語彙単位としては単一な様ではあるが、内容的には多義の意味を分類整理し個別に記述されているので複数のモウケルがあるかの様な印象を受ける。同音異義語なのか、それとも多義語なのか、明確化されていない様に思われる。

### 3 教育的側面

モウケルは中・上級での基本語の1つであり、普及度の高い『みんなの日本語 中級1』(2008)<sup>2</sup>で見られ、日本語能力試験では「儲ける」、「設ける」が夫々N2、N1の語彙リストにある。教育上では2つのアプローチが考えられる。

同音異義語の場合。語彙を3単位で教えるのは数が少ないので教育的には十分有効と思われる。学習者は夫々の語彙に対して表面上の意味を学習するだけで良い。大体の学習者及び教師はこの方法を取るのではないだろうか。

多義語の場合。語彙単位が1つ方が3つより便利である。しかし単一語彙だけの習得で済まない。この場合、意味の同一性を支える統一操作を分析で抽出しなければならないが、教育現場ではそんなことをしている暇もないし、また全ての日本語教師が分析ができる訳ではもない。また統一操作が複雑で、その応用が教育的に逆効果になる恐れも考えられる。それでは百害あって一利なしの様な印象さえ与えるがどうして態々この方法を取るのか、と問われるだろう。それは記述はより経済的で統一的であった方がいいと言う一種の信念があるからである。以下の分析ではこの信念に従って進めるが、分析結果の日本語教育への応用例も統一記述後に示したい。

### 4 分析

#### 4.1 分析装置と仮説

ここで名辞 X と名辞 Y の間の関係を LYONS(1970)<sup>3</sup>、BENVENISTE(1966)、CULIOLI(1970)に従って次の様に定義する。

##### (15) 関係

X □ Y: X は Y から関係付けられる

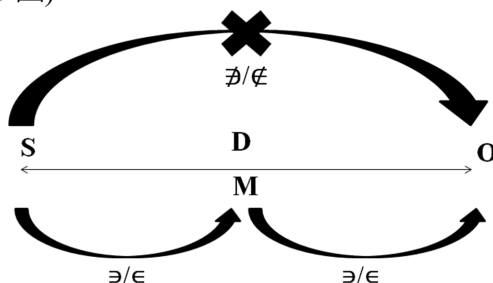
Y □ X: Y は X を関係づける

この関係を使ってモウケルの一般操作を次の様に提案し図示しよう。

##### (16) 仮定 「モウケル」の一般操作

主体 S と客体 O が距離 D をもって離れて置かれる。この距離 D によって主体 S と客体 O の間には直接的な関係は出来ない。主体 S は中間点 M を介して客体 O と間接的に関係を作る。

##### (16 図)



#### 4.2 代表的な意味用法の記述

上記の仮定を基に代表的な意味用法だけ分析してみよう。

(A-1) 建物、設備、組織、規則を作り備える、設置する。

(17) 政府はこの問題の対処に特別委員会を設けた。

(18) 政府は特別委員会を設けてこの問題に対処した。

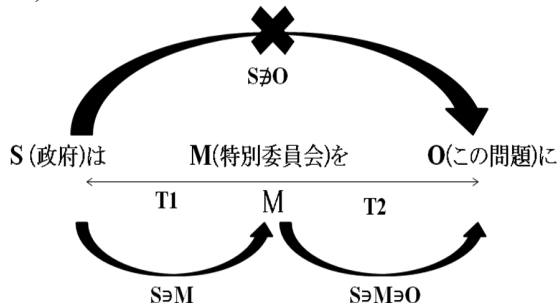
(17P) パラメーター: S=「政府」、O=「この問題」、M=「特別委員会」

間接的關係:「特別委員会」により構築

解釈 「政府」(S) と「この問題」(O) は時間空間的に離れて位置する (D)。「政府」(S) は直接的に「この問題」(O) に対処の關係を作ること(S  $\ni$  O) が出来ない(S  $\not\ni$  O)。そこで先ず第1時点(T1)で「特別委員会」(M)を作り(S  $\ni$  M)、続く第2時点(T2)で、「特別委員会」(M) を介して間接的に「この問題」(O) に対処の關係を作る(S  $\ni$  M  $\ni$  O)。尚 T1  $\neq$  T2、T1 < T2。以上の記述で「備えてこしらえる」の意味構築が明確になると思われる。

以上を以下に図示する。

(17 図)



この図でヲ格が M に現れ M が O に対して構築されている。このことがヲ格の名詞で觀察された対他性を説明すると思われる。

(A-2) 将来の必要時のために前もって用意・準備する。

(19) 若山さんはお客さんをもてなすために一席設けた。

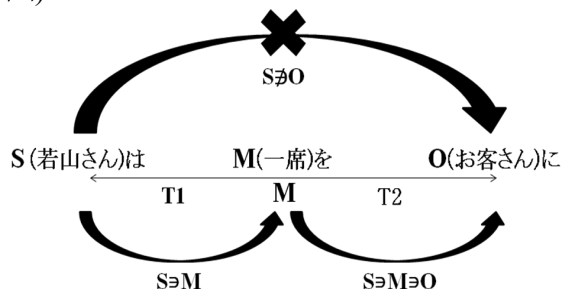
(20) 若山さんは一席設けて、お客さんをもてなした。

(19P) パラメーター: S=「若山さん」、O=「お客さん」、M=「一席」

間接的關係:「一席」により構築

解釈 (17)と同様の解釈が可能である。「若山さん」(S) と「お客さん」(O) は時間空間的に離れて位置する (D)。ここで「若山さん」(S) は直接的に、直ぐに、「お客さん」(O) をもてなしの關係を作ること(S  $\ni$  O) が出来ない(S  $\not\ni$  O)。そこで先ず第1時点(T1)で「一席」(M) を作り(S  $\ni$  M)、続く第2時点(T2)で、「一席」(M)を介して間接的に「お客さん」にもてなしの關係を作る(S  $\ni$  M  $\ni$  O)。尚 T1  $\neq$  T2、T1 < T2。以上を図示すると次の通り。

(19 図)



[B] 思いがけず、偶然に利益を得る、得をする。

(21) 若山さんは {宝くじ/株/競馬} で大金を儲けた

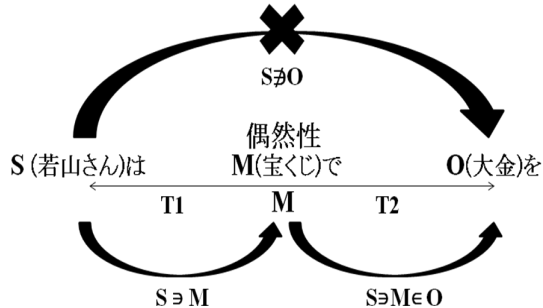
(21P) パラメーター: S=「若山さん」、O=「大金」、M=「 {宝くじ/株/競馬} 」

間接的關係:「 {宝くじ/株/競馬} での「偶然性」で構築

解釈 「若山さん」(S) から {宝くじ/株/競馬} (M) を介して大金 (O) への關係は直接的ではない(S  $\not\ni$  O)。この關係は間接的であり、この間接性は M に現れる偶然性から作られてい

ると考えられる。以上の構築を基に解釈すると「若山さん」(S)は第1時点(T1)で「宝くじ/株/競馬」(M)に参加し(S ⊃ M)、続く第2時点(T2)で偶然に「大金」(O)を得る(S ∈ O)。この第2関係での関係記号の方向に特に注意されたい。尚ここでも T1 ≠ T2、T1 < T2。以上を以下に図示する。

(21 図)



[C] 子供を作る

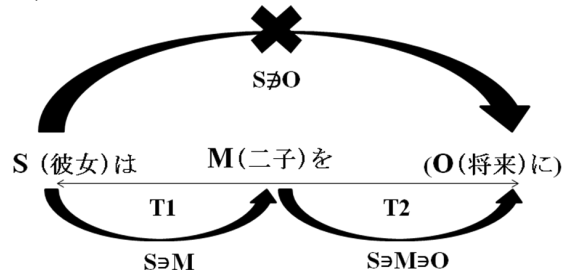
(22) 彼女は結婚で二児をモウケタ

(22P) パラメーター: S=「彼女」、O=「将来」(文中に現れない)、M=「二児」

間接的關係: 「二児」を得たことにより構築

解釈 「将来」(O) は時間的に離れて位置づけられている (D)。ここでは「彼女」(S) は直接的に、直ぐに、将来 (O) に対処すること (S ⊃ O) が出来ない(S ≯ O)。彼女 (S) は先ず第1時点の結婚 (T1) で「二児」(M) を得た(S ⊃ M) あとで、続く第2時点(T2) で、二児 (M) を介して間接的に将来 (O) に備える(S ⊃ M ⊃ O)。これは語源<sup>4</sup>に近い解釈であり、将来の備えを意味する。以上を次に図示しよう。

(22 図)



#### 4.2 自動詞形 モウカル

以上の記述から自動詞形モウカルへの変換が説明できないだろうか。この形は [B] からのみに可能なので [B] に特殊な構成があるものと考えられる。ここではヲ格は M ではなく O に現れている。S M 間の構築は S の直接介入を受けるが、MO 間の構築は S は O に直接介入はできない。ヲ格の対象は O にあるため S の直接介入を受けず独立することになり、ここから自動詞形モウカルへの変換が可能になるのではないだろうか。

### 5 結論 日本語教育への応用可能性

モウケルは操作として同一と思われる。表面上に見られる不均質な意味は文脈変化に因っているものだと考えられる。モウケルの語彙単位は1つであり、統一的説明が可能だと考えたい。最後に日本語教育への可能な応用例として曖昧性を考えたい。次の例文を見られたい。

(23) 賞金をモウケル

ここで 同音異義語の立場に立つと(A-1)「賞金を設置する」と [B]「賞金を得て得をする」

の二つの解釈を二つの全く別々の語彙として説明しなければならない。しかし同一操作で多義語として捉えると二つの意味用法の違いはヲ格が M にあるか O にあるかで簡単に説明される。この様に説明すれば羅列された意味を単語別にただ覚えて来た学習者には思いがけない発見となり学習意欲の向上にも繋がるのではないかと思われる。

---

注.

<sup>1</sup> 『小学館 全文全訳古語辞典』(2008), P.1035。

<sup>2</sup> 第 10 課、P. 128 に「カラオケを発明した人が特許をとっていたら 100 億円は儲けたはずです」

<sup>3</sup> 第 8 章 4 節に詳しい。

<sup>4</sup> 『小学館 全文全訳古語辞典』(2008), P. 1035 に「儲けの君」と言う表現があり「次代の天皇として用意された皇子。皇太子」を指す。

### <参考文献>

Benvéniste, E. (1966) « Être » et « avoir » dans la fonction linguistique. *Problèmes de linguistique générale 1*, Paris, Gallimard : 186-207.

Culioli, A. Fuchs, C. Pêcheux, M. (1970) Considérations théoriques à propos du traitement formel du langage. *Document de linguistique Quantitative*, no 7, Université de Paris 6.

Claude Lévi-Strauss, C. (1968) *Les Structures élémentaires de la parenté*, La Haye-Paris, Mouton

Lyons, J. (1970) *Linguistique Générale*, Paris, Larousse.

辞書

『古語大辞典』(1983) 小学館 初版 第一刷

『角川古語大辞典』(1999) 第 5 巻 角川書店 初版

『三省堂 詳説古語辞典』(2000) 三省堂 第一刷

『新訂字訓』(2005) 平凡社 初版

『日本語語源大辞典』(2005) 小学館 初版 第一刷

『最新全訳古語辞典』(2006) 東京書籍 初版 第一刷

『旺文社 古語辞典』(2008) 旺文社 第十版

『小学館 全文全訳古語辞典』(2008) 小学館 初版 第四刷

日本語教科書

『みんなの日本語 中級本冊 1』 (2008) スリーエーネットワーク